

○佛國
畫家 コラン 先生

黒田清輝

今度の白馬會の展覽會に出陳してあるラファエル、コラン先生の「彈手」と題する畫は、昨年ある機會があつて岩崎男爵が此地へ取寄せられたのです。コランと云ふのは私の師と仰いで居る人で、私のコラン先生に弟子入りしたのは慥か明治十九年の秋であつたかと思ひます。尤も其前年位から知己にはなつて居たので、其の動機はと云ふと、日本から藤雅三といふ人が工部省の美術學校を卒業して繪畫研究の目的で佛蘭西へ渡つて來ました。其頃日本人



ラファエル・コラン《彈手》

で繪畫の爲め彼地へ留學して居た者が二人あります、夫は山本芳翠君と五姓田義松君とで、前者はゼロム、後者はボンナと夫々異つた師について學んだのですが、此の二人の佛蘭西畫家は共にクラシック派に屬する人達で、當時の所謂第一流の大家であつたのです。藤君は巴里以來で先づ美術館につき甚そんな麼人に依つて研究したものかと畫の撰擇にかゝつたが、コランの畫風を見て深く感動して此人について勉強しやうと云ふ考へを起した。併し悲しい事は來たてのとで佛蘭西語は少しも通じない。其時分私は畫家にならうとは思はず、外の目的の爲めに普通學を修めて居たので、佛語はもう一と通り解るやうになつて居たのですが、元來畫が好きでしたから、藤君と一緒に往つ

て呉れないかと頼れて通辯代りに往つたのです、是が私のコラン先生と知己になる抑々の初めでした。先生は其頃未だ他のゼロムやボンナ杯と拮抗する如な第一流の作家とは認められない時代です。尤も今日では古い大家が多く逝くなつたのと、先生も年を取られ研究も積まれたので自ら位地も高まり、諸種の展覽會に審査員を勤める程の有數な畫家となつて居られる。先生は一千八百五十年の生れですから、私が弟子となつた時は未だ四十足らずの極く若い盛んな人であつたのです。

此の先生の畫風について大体の處を話して見ると、今度白馬會の展覽會に出してある畫杯は先生の極く初期の作品で私等の門に入つた以前に出來たものです。先生が初めて其畫をサロンの展覽會によつて世に示したのは一千八百七十三年で、其時「居睡」と云ふ畫題の裸體畫を出品していきなり二等賞を得た、其畫は今も佛蘭西のルアンと云ふ所の美術館に保存されて有る。

先生は素巴里の美術學校で學び、カバネルといふ人の門人ですから矢張りクラシック派の出で、此の明治初年かから十二年頃までは今度出品してある「彈手」の如な畫風であつたのです。夫れから暫くして、私等の弟子入りをする三四年前までの間に畫風が大に變つて來た。其變化の有様は甚麼風であつたかと云ふと、所謂美術學校風のクラシック派のものを離れて漸次其の時代の風潮に染んで來た、即ち外光に興味を有ち肖像を戸外にて描かうと試みるやうになつた。先生を此處へ導いたのはバスタアン、ルバージュといふ人である此人は一寸繪畫の研究した人で知らぬ者が無い程有名な人で非常な手腕を持つて居たのですが、惜む可し明治十八年に卅七才で死んだ。このバスタアン、ルバージュはコラン先生と同郷で且つ同門の兄弟子であつたので、親しく交はつて居た處から、先生は

其の感化を受けたのです。バスチアン、ルバージュは外光に注意し、新畫風を創始したとも稱せられ得る人で、其の技術が次第に成熟し年々の展覽會に出品して世の驚嘆を得ると共に、先生の技術も進みし上彼に啓發せられて外光研究に念を潜めしものと察せられる。是等の事は私等の弟子になる前の話で、弟子入り後に先生の學説や又バスチアン氏についての話を聞いたのを綜合して見ると右の如うです。

明治十七年のサロンの展覽會に「夏」といふ畫題の大作が出品されたが、其時分私は巴里に往つて居ましたけれど、未だ畫家として立つと云ふ考も無かつたので見なかつた、が後になつて其畫を見ました。で此畫になるもう巴里に黒い色が無く純外光派になつて居る。私の親しくサロンで見たのは十九年の「花時」と云ふ題の裸美人畫が初めて、此頃にはクラシツクと云ふ部分は全く影を隠して跡も止めない。其後の作は十年も親しく接して居た間は勿論、歸朝後も複寫にて見又巴里に再び遊んだ折に見て居ますが、此間に先生の畫風が二度許り變化して居ますと云ふのは明治二十年前後には多く薄緑の色を用ひ、いくらか寒色の感が多かつたのを、其後は漸次寒色が暖色に變じ黄色を帯びて來たのです。色の調子から云へば始めは今度の白馬會で見ると如うな至極鮮明なものであつたのが、次第々々に薄くなり、二十年前後に比すれば今日は一層薄く淡い。ですが暖か味から云へば低い調子の暖かい方へ次第に向いて往く。で形式上からは以上に云へる如う烈しく變化して來たのですが、先生の性質を終始一貫して變らない點は自然を愛する事で、多くの裸美人を畫き、親切に自然を寫し、よく自然の詩趣を了解して畫に表すは先生の得意とする處です。たとへ先生の所謂クラシツク時代の作品でさへも確に此の詩趣が含まれて居る。

『読売新聞』明治四二年五月二〇日

白馬会第一二回展（明治四二年四月二六日～五月二日）に出品されたラファエル・コランの《弾手》については、山本香瑞子「日本におけるコラン受容についてのメモ——展覧会を中心に」（福岡市美術館編『ラファエル・コラン展』図録平成二年九月）を参照。